

岡道男教授追悼

清水 茂

岡道男教授が亡くなられたことを聞いて、愕然としました。わたくしは、定年退官後、岡さんからおりおり著書や訳書を頂いたりしていましたが、ご病気ということはまったく知らなかったからです。中国文学を専攻するわたくしが、西洋古典文学に首をつっこんだのは、わたくしの学生の時、松平先生がヘーシオドス『仕事と日』を講じておられ、古代ギリシャの農事詩であることを何かで知って、中国古代の農事詩である『詩経』七月篇と比べてみたいと思ったのがそもそもの始めです。そのころの西洋古典の授業は、出席の学生が少なく、出てみたら三・四人、たしか松本仁助さん・大谷恒彦さんが出席されていたように思います。そして講義を聴講するつもりだったのが、テキストを読みますということで二度びっくり、聴講者が多ければ、逃げだすところですが、三・四人では、他の方々に申し訳なく、ギリシャ語のにわか勉強を田中美知太郎先生の哲学科のためのギリシャ語初歩に出席して始めました。そこまで首をつっこむと、せつかく憶えたギリシャ語を離れて忘れるのも惜しく、毎年松平先生のギリシャ語のテキストを読まれる授業に出ていました。それで、『イーリアス』第一・二巻、ツキジデスを読んでいた記憶がありますが、そのとき初めて岡道男さんとお出あったと思います。そのころ、そうしたギリシャ語の授業に出席していた人は、独文の学生が多く、松本さん・大谷さんもそうでしたが、岡さんも独文でした。

そして、はじめは、中国文学の作品の比較に西洋古典を使うときに知恵を借りるのに、松本さんをお願いしたのですが、岡さんが京大文学部に来られてからは、岡さんのところに行くことになりました。中国に「賦」という朗誦形式の韻文があり、歌唱される「詩」と対するのですが、西洋のエピックと共通するのではないかという議論をしたときには、岡さんにエピックの朗誦について聞きに行きました。（拙著『語りの文学』筑摩書房、1988、34頁参照）このように、いろいろ話し合っているうちに、岡さんが旧満洲すなわち中国東北部育ちであることを語られ、いつか、自分の育った土地を再訪したいとおっしゃっていました。仕事から、旧満洲育ちの人に、日本にも中国にも知合いがありますが、お互いに幼なじみに国境を越えて親近感のあることを感じています。それだけに岡さんのこの気持ちがよくわかり、わたくしも、中国文学研究者として機会があったらごいっしょしたいと思っていましたが、ついにその機会の

ないまま訃報を聞きましたのは、早すぎた知らせであっただけにことさらに残念でした。ご冥福をお祈りするとともに、中国旅行をともにできなかったことをおわびしたいと思います。